

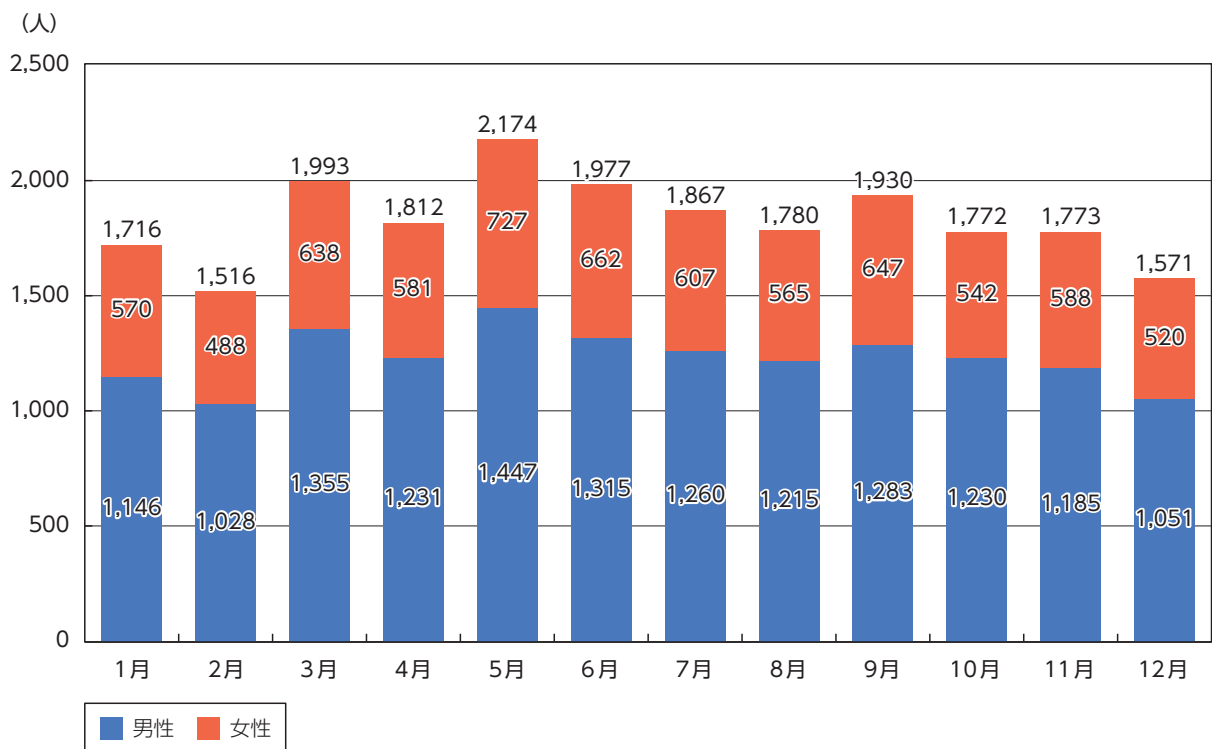
5 令和4年の月別・曜日別の自殺の状況

(1) 令和4年の月別の自殺の状況

令和4年の自殺者数を月別にみると、男女ともに「5月」が最も多く、それぞれ1,447人、727人であった。次いで、男性は「3月」(1,355人)、「6月」(1,315人)が多く、女性

は「6月」(662人)、「9月」(647人)が多かった。また、男女ともに「2月」が最も少なく、それぞれ1,028人、488人であった(第1-26図)。

第1-26図 令和4年の月別自殺者数

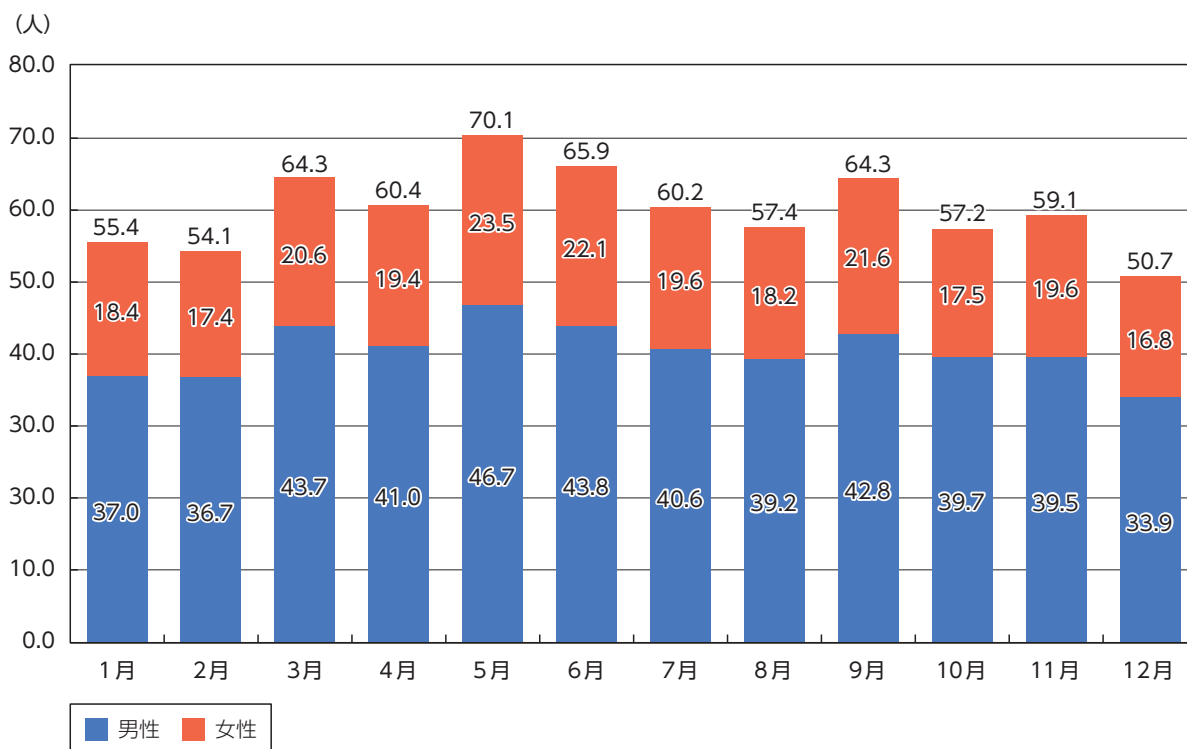


資料：警察庁「自殺統計」より厚生労働省自殺対策推進室作成

月別の1日平均自殺者数においても、男女ともに「5月」が最も多く、男性は1日あたり

46.7人、女性は1日あたり23.5人となった(第1-27図)。

第1-27図 令和4年の月別1日平均自殺者数

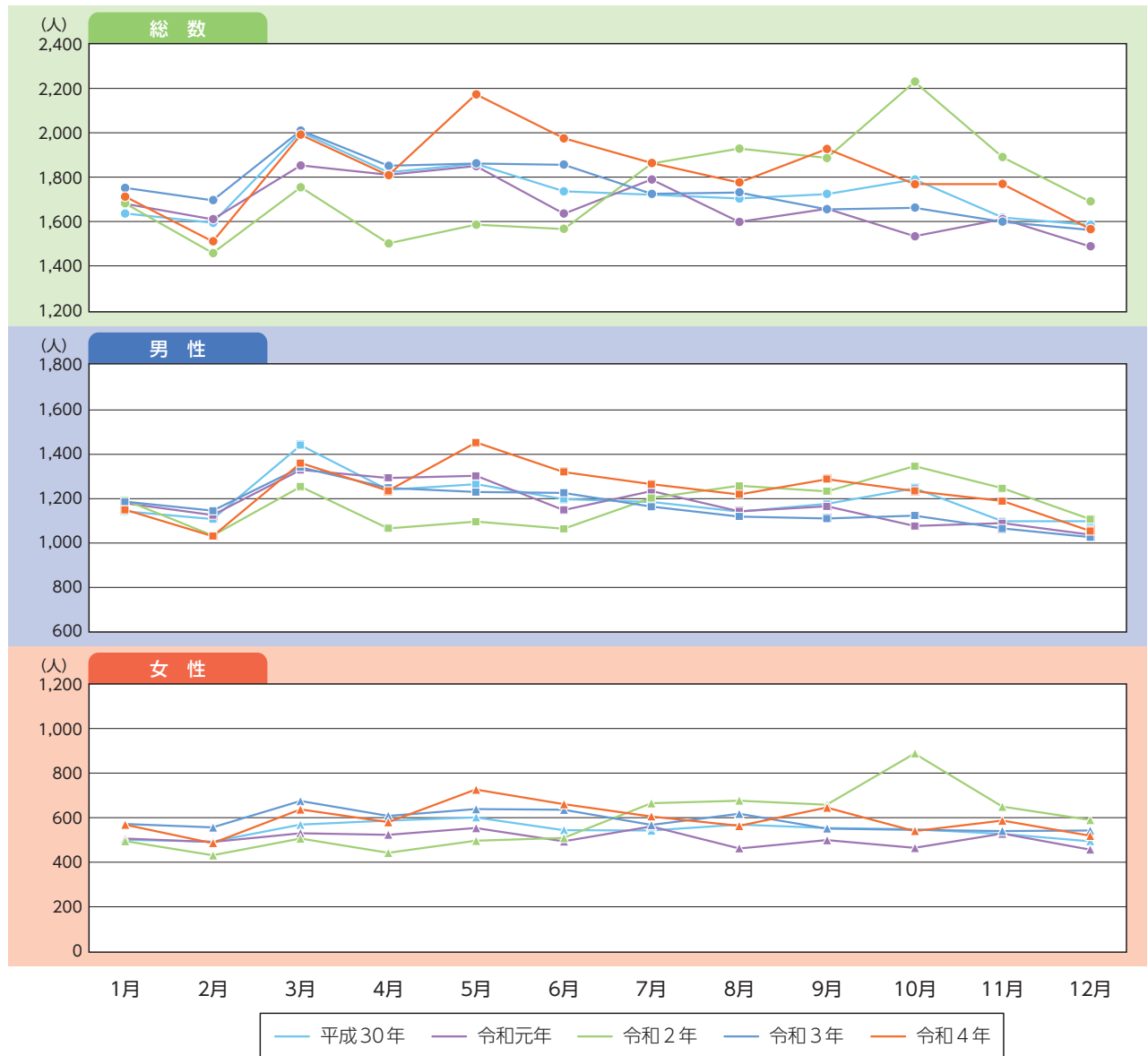


資料：警察庁「自殺統計」より厚生労働省自殺対策推進室作成

月別自殺者数を直近5年で比較すると、「5月」、「6月」及び「9月」は各々直近5年の同月比較で最多となった。一方で、最少となった月は一度もなかった（第1-28図）。男女別にみると、男性は「5月」、「6月」、

「9月」に加え「7月」も直近5年の同月比較で最多であった。対して「2月」は最少であった。女性は「5月」及び「6月」が同じく最多であった。

第1-28図 月別自殺者数の推移（5年比較）



資料：警察庁「自殺統計」より厚生労働省自殺対策推進室作成

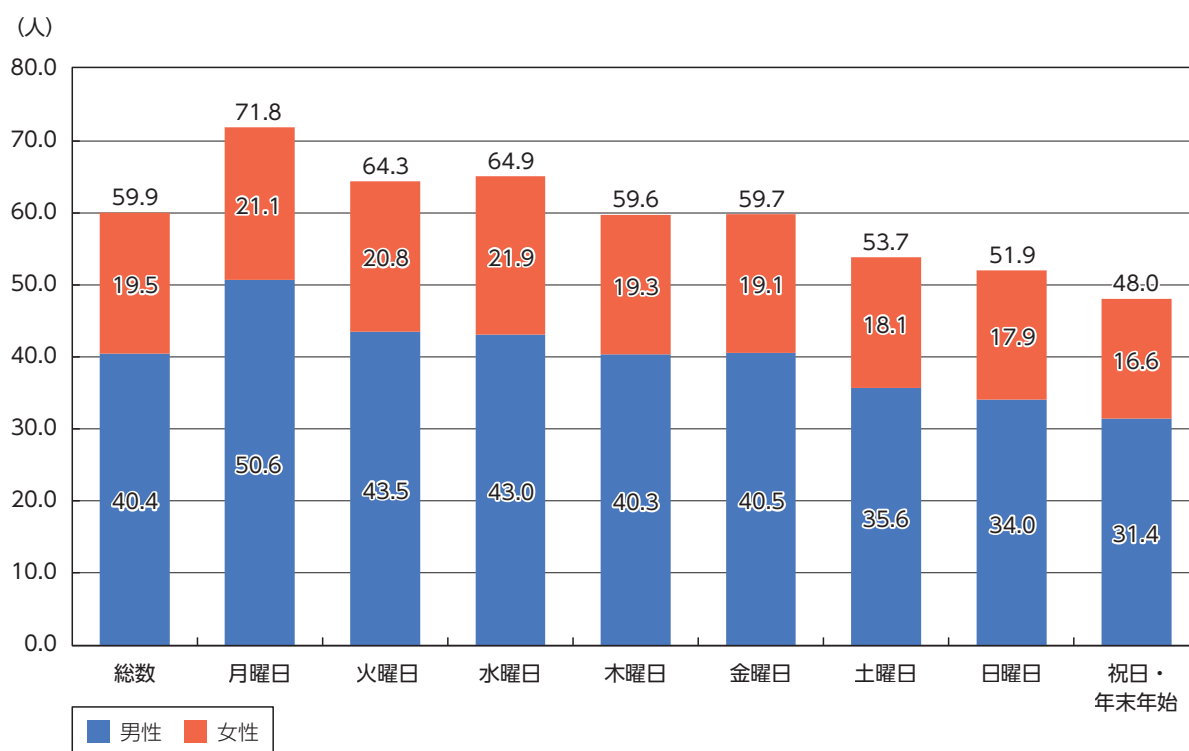
(2) 令和4年の発見曜日別の自殺の状況

令和4年の自殺者数を1日平均に調整した発見曜日別にみると、「月曜日」が最も多く71.8人、「日曜日」が最も少なく51.9人であった。また、「土曜日」が53.7人と2番目に少なく、「祝日・年末年始」でみても48.0人であり、平日と比べて休日が少ない傾向であっ

た。

男女別にみると、男性は「月曜日」が最も多く50.6人、「日曜日」が最も少なく34.0人であり、女性は「水曜日」が最も多く21.9人、「日曜日」が最も少なく17.9人であった。なお、「祝日・年末年始」については男性が31.4人、女性が16.6人であった（第1-29図）。

第1-29図 令和4年の発見曜日別1日平均自殺者数



資料：警察庁「自殺統計」より厚生労働省自殺対策推進室作成

COLUMN 1

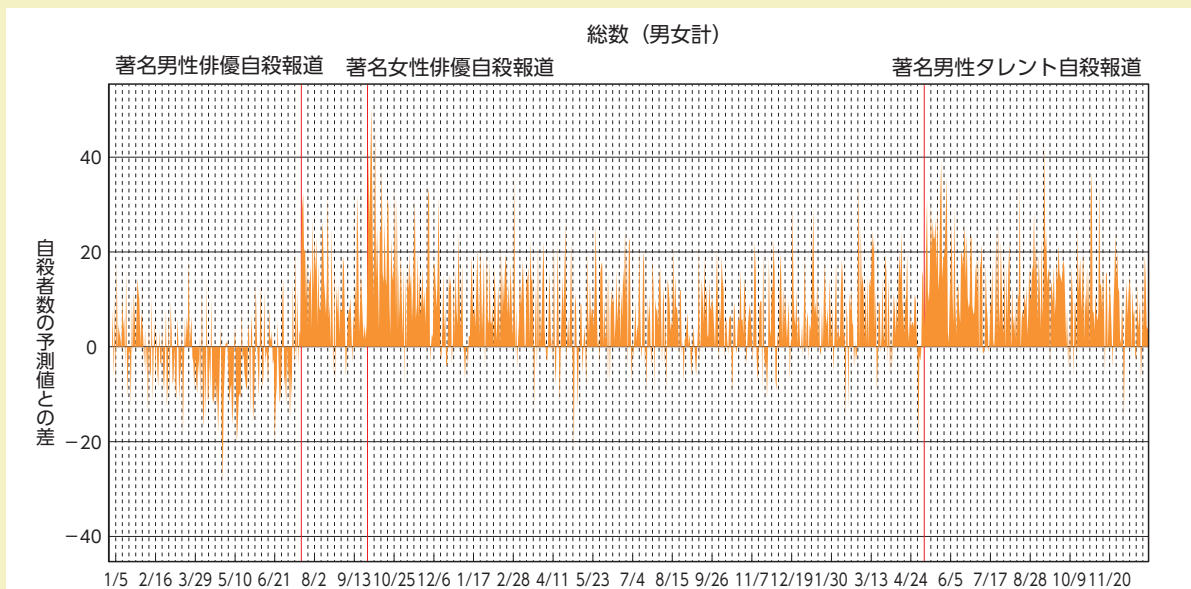
令和4年5月の著名男性タレントの自殺報道に関する分析 —ウェルテル効果を抑制するためのメディア関係者を 巻き込んだ取り組みの必要性—

著名人の自殺報道後に自殺者数が増加する現象は、1774年にゲーテの小説『若きウェルテルの悩み』発刊後に主人公と同じ方法によって自殺で亡くなる若者が相次いだことにちなみ、「ウェルテル効果」(The Werther Effect / Suicide Contagion) と呼ばれる。1974年に米国の社会学者ディヴィッド・フィリップス (David P. Phillips) が実証研究に基づいてこう名付け、以後各国で数多くの報告が存在する。

日本では、新型コロナウイルス感染症拡大下の令和2年から4年にかけて、著名人の自殺報道が相次いだ。令和2年7月18日及び同年9月27日に発生した自殺に関する報道による自殺者数への影響については、『令和3年版自殺対策白書』やその他の調査研究において既に報告されているものの、令和4年5月11日に発生した著名男性タレントの自殺報道については未だ検証が行われていない。そこで本稿は、この自殺報道後に自殺者数の増加がみられたか否かについて警察庁の自殺統計原票¹を用いて検証を行った。

自殺報道の影響を定量的に評価する方法として、超過自殺の推定がある。超過自殺は、予測モデルから算出される予測値と実測値との残差、すなわち過去の推移から予測される自殺者数から実際の自殺者数がどの程度乖離したかを推定することで示すことができる²。

グラフ(単位:人)は、回帰モデルに基づいて算出した「予測値」と令和2年から4年の実際の自殺者数「実測値」との差を示したもので、0を起点に上振れしている部分は予測値よりも実測値が多かった(超過自殺)人数、下振れしている部分は予測値よりも実測値が少なかった人数を示している。令和4年5月11日から約2-3週間に渡って持続的に超過自殺が発生しており、ウェルテル効果の可能性があることが示唆された。令和2年7月18日の著名男性俳優の自殺報道とほぼ同等の影響があったと考えられる。ただし、当該自殺報道の影響以外の要因も考慮する必要がある。



資料：警察庁「自殺統計」より自殺対策推進センター作成

- 1 自殺者数は、令和4年の確定値を用いて、自殺者の「発見日」ではなく自殺者の「自殺日」を基に日次集計を行った。
- 2 過去5年間(平成27年から令和元年)の日次自殺者数を被説明変数、暦日・週次・曜日・祝日・祝日前日・祝日翌日を説明変数として、ポアソン回帰を用いた分析を行った。

このようなウェルテル効果を食い止めるためには、自殺対策のパートナーとしてのメディア関係者に対し、世界保健機関（WHO）により作成された自殺報道に関するガイドライン『自殺対策を推進するためにメディア関係者に知ってもらいたい基礎知識』を遵守してもらうよう呼びかけ、安全な報道に対する認識を高めてもらう必要がある。一般社団法人 いのち支える自殺対策推進センター（厚生労働大臣指定調査研究等法人）では、「自殺報道のあり方を考える勉強会」を定期的で開催しており、メディア関係者との協力関係を構築しながら、ウェルテル効果が懸念される際には厚生労働省と連名で「自殺に関する報道にあたってのお願い」としてメディア関係者へ注意喚起も行っている。

今後は、より効果的な自殺対策を推進するために、ウェルテル効果による自殺者の属性の分析、報道の量と質の評価、報道による自殺の抑止効果（パバゲーノ効果³）の検証、SNSを含むサイバー空間における情報の拡散など様々な論点についてエビデンスを蓄積していく必要があるだろう。自殺とメディアとの関係は、今後の調査研究の進展が期待される領域である。

一般社団法人 いのち支える自殺対策推進センター（厚生労働大臣指定調査研究等法人） 分析官
新井崇弘

- 3 パバゲーノ効果とは、個人が自殺の危機を乗り越えるという希望や支援に焦点を当てたメディア報道が、他者の自殺を抑制する可能性を高める効果を指す。モーツァルトのオペラ『魔笛』に登場するパバゲーノが自殺を試みようとしたところ、あることがきっかけで自殺を思いとどまったという劇中のエピソードに由来する。